

平成27年度
ひらめき☆ときめきサイエンス～ようこそ大学の研究室へ～KAKENHI
(研究成果の社会還元・普及事業)
実施報告書

HT27297

「精神障害者・回復者雇用の重要性
—医療・保健・福祉分野を目指す上で—」



開催日：平成27(2015)年8月8日(土)

実施機関：沖縄キリスト教学院大学
(実施場所) (シャローム会館1-2教室)

実施代表者：近藤 功行
(所属・職名) (人文学部・同大学大学院・教授)

受講生：高校生14名

関連URL：

【実施内容】

【受講生に分かりやすく研究成果を伝えるために、また受講生に自ら活発な活動をさせるためにプログラムを留意、工夫した点】
……提出時のプログラムをもとに、「生徒参加型」内容に改善を試みた。

1)改善点1

→精神障害を理解させる上で、精神障害についてすり込んだあるページからしか理解できない弊害があることを教示する。思考を働かし、疑問点や意見を誘発する。

2)従来型・継続

バウムテスト………下記スケジュールを参照
健常者と障害者の記号を示す作業………下記スケジュールを参照

3)改善点2 質問用紙配布を新たに実施

午前中&午後2回の「講話」中心となっている時間で、質問用紙を配布して、質問を書いてもらうことに。
→質問内容:「今の時間の話を聞いて、もっと知りたいことはありますか?専門用語はなるべく使わないようにしますが、もし、わからない点があれば書いてください。」当日出てきた質問への回答は、実施後で作成する報告書で、これら一連の回答を記載し、受講生に配布を行う。そのため、事前資料と事後資料の2つでもって、このプログラムの補強が成り立っている。

4)従来型・継続………奄美に関心を持ってもらう努力

「皆さんのなかで、ルーツを奄美にもつ人は、誰かいますか?」(問いかけの実施)。
→板書で、沖縄本島から奄美大島までの各離島を書いた上で、戦後、奄美群島内と沖縄で2つの復帰劇が繰り広げられることを説明。歴史的な教示になるが、こうした内容を再確認してもらう。復帰前、奄美群島の島々が復帰する前、奄美大島から沖縄に渡った人が3万人、いる事実を知っていますか?(今年度は、奄美大島・奄美群島の島々の背景を押えることから始める)。終戦、奄美の復帰までは、奄美・沖縄が沖縄に統治されていたから、奄美大島からは沖縄に出て行った人が3万人いた。奄美大島は、当時、貧乏な島だった。
沖縄の復帰……沖縄返還1972(昭和47)年5月15日。沖縄(琉球諸島及び大東諸島)の施政権がアメリカ合衆国から日本に返還される。この前が、奄美の復帰。
奄美の復帰……奄美群島は、1953(昭和28)年12月25日本土復帰。奄美が復帰すると、国境が与論島で区切られていた。
この時、これまで沖縄に流れていた人達が、大阪方面に流れ始める。終戦当時は28万人だった奄美大島の人口が、今は12万人になっている。奄美群島が復帰する前は、3万人の人が沖縄に流れた。その後、沖縄が国境となり、沖縄に行けないので、関西に10万人の人が流れた。ここ10年で1万人ずつ減少したことになる。大学に行って成功した人は都会に残り、逆に、精神障害などで親元に戻ってくる人がいる。奄美大島の生活保護世帯は全国の10倍の現状がある。

【当日のスケジュール】【実施の様子(図・写真含む)】

10:15集合

10:30~10:45

テーマ:「精神障害者・回復者雇用の重要性—医療・保健・福祉分野を目指す上で—」の説明を開始。沖縄本島から、奄美大島までの地図を黒板に書くなど、事前説明および科研費の説明に入る。
今回のテーマ:医療・保健・福祉に関する。身体障害児/者、的障害児/者、精神障害児/者。近年、「害」の字を「がい」とひらがなで表記したり「碍」と表記するが、近藤作成の資料では「障害」と表記する。これは、定款=法律用語のまま用いる。



10:45~11:00

参加者(14名)と、実施協力者に絵を描いてもらう
①健全者を(○)で表すとしたら、障害者はどんな印で表しますか？
②みなさんがイメージする木の絵を描いてください(パウムテスト)



11:00~11:10

休憩

11:10~11:55

恵川龍一郎所長の紹介。奄美大島の背景を説明



11:55~13:00

お昼ごはん

13:00~13:45

法律では、①身体障害→②知的障害→③精神障害の順番で整備されていく経緯がある。-歴史的背景を見て行くと、奄美大島も、昔はアメリカの統治下にあり、沖縄より先に本土復帰している。
沖縄には約140万人、鹿児島県には約170万人の人口がある。両県を合わせると、約310万人。日本全国では、精神病を患う人々が、この数字と同じくらいになる。-おそらくこの人数は、今後、ますます増えていくと思われる。-父親を示す言葉は、いくつあるのだろうか。Dad、おやじ、お父さん。言葉は、シンボル。1つの単語で表すことが、出来る。しかし、一生懸命働いていたお父さん、お酒を飲んでいたお父さんと記憶の中に、いろいろなお父さんの姿が見えてくる。-人間には色々な側面があるのに、一つの側面しか見ない人がいる。-1つ2つの見方しかできないという事は「物の考え方が歪んでいる」という事となる。
健全者と障害者を分ける
-健全者という立場にいると「不安から逃れることが出来る」
-健全者⇄障害者
午前中実施した質問①の解説
質問:健全者を○で表すとしたら障害者はどんな印で表しますか？
参加解答の多くは☆、△等かけているものが多い。しかし正解は○健全者も○、障害者も○で示するのが正しい。

13:45~13:55

休憩

13:55~14:40

発達障害=病前性格
-発達障害は、障害者手帳が発行されない。障害ではないのに、障害という名前がついている。
-スイッチが入ったら、暴走してしまう。こうした側面の講話あり。
全体の2%を就労させないといけない。でも、この数値はとても難しい。例えば、時給400円のピラ配りのバイト、アパートの2階まで上がるのが億劫で、1階の人にピラを3枚ずつ入れてしまいクリームが来る。
-職員が、後について回って確認した。しばらくして、奄美で変な噂が立った。「明りの家」と言う団体は、精神障害者にお金を配っているらしい」。
障害者雇用の重要性 近藤功行作成資料137頁、フックに引っかかったらダメ。
ここで言うところのフックとは、1つの物の見方しかできなくなること。
-福祉に携わる人の事を、英語で、Advocator(代弁者)と言う。
-沈黙は最大の罪(キング牧師)
-障害を持つ人も、だんだん回復している。私は、健全者→あなたは、障害者。
-壁を作りたがる人は、こうやってベクトルを相手に向けます。
-犯罪者の75%は発達障害
-就職して社会とのかかわりを持たないと再犯してしまう。社会とのかかわり、つまり人間としてのつながりが大切。そのためには、社会が彼らを受け入れるパイを持っていないといけない。
-現在、恵川所長の所では、20人弱の利用者がいる。

14:40~14:50

休憩

14:50~15:30

質疑応答
Q1:テレビでうつ病になりやすい人の特徴が取り上げられているのをよく目にするのですが、他に特徴はあるのですか？
A:真面目な人はいっぱいいます。健全者と障害者に境界線はありません。それが理想です。
Q2:柔らかい頭は誰でも作れますか？
A:もちろんです。大切なのは考えを一つに固定しない事です。
Q3:なぜ、年々精神障害の人数は増えて行くのですか？減ることは、ないのですか？
A:どんどん、増えていきます。医療福祉に、目が向けてられているから増えて行くと思います。今後の課題は、医療費が高くなっていくことです。
Q4:発達障害の生徒に対して、どうやって接したらいいですか
A:若い支援員の発達障害に対する教育が、きちんとできていない。
Q5:自分の子供に虐待している親も、発達障害何ですか？
A:はい。そうです
Q6:障害者賃金は、上がらないの？
A:おそらく、上がらないでしょうね。今は、多くの作業が機械化されていて、障害者が出来る作業が少なくなっているので、今後ますます厳しい現状になっていくと思います。

15:30~15:40

休憩

15:40～16:00

質疑応答の続き

Q7: どうして、障害ではないのに発達障害という名前がついているのですか？

A: 難しい問題ですね。発達障害とは、病前性格の事ですとして、その性格が環境に適応できない事で悪化してしまいます。それは、適応障害、または環境障害と言います。そこから、また悪化して人格障害、最悪、境界性人格障害という犯罪性を帯びたものへと悪化していく可能性があります。

Q8: 利用者の方とコミュニケーションが、図れない時はありますか？

A: あります。どうしても患者さんの脳の調子が悪くてコミュニケーションが図れない時は、肩をたたいたりしています。調子がいい時に、ラポール(=信頼関係)を築きます。

Q9: 介護施設で実習を行っているのですが、この施設で、コミュニケーションのとれない認知症の患者さんを「扱いにくい」利用者というレッテルを張っていることがあります。このことについて、どうすればよいですか。

A: 福祉の現場は、6:4で、はずれが多い。

-現場で、25年施設長をしていて、だいぶ、福祉のレベルは上がってきたと思う。

-『ありがとう』といわれると職員も、喜びながら出来る。

-利益追求の施設は、あまりよいとはいえない。

-都会は、どうしても、利益追求の施設が多く、逆に、沖縄や奄美大島では心が温かい。

—福祉の仕事は、嘘つきで出来るような仕事じゃない。

16:00～16:10

アンケート記入

未来博士号授与(証書を手伝い学生1名に付き添ってもらい、1人1人手渡しで)

集合写真撮影:「ひらめき～い、ときめき～い、さいえ～～んす!」のかけ声で(実施協力者:喜屋武祐(=近藤功行・卒論ゼミ4年生)から)、みんなで写真を撮る。



【事務局との協力体制】

2008年度・2010年度・2011年度・2012年度・2013年度採択と、その後、現在まで本学においては、企画推進課で本プログラム採択からの蓄積をはかってきた。開始前では、(1)参加校・参加問い合わせ対応、同伴者の確認、書類で不備があった場合の確認、(2)参加校の実績記録並びに当日に向けての諸準備、(3)手伝い学生の確認、当日準備に際しての一部指示(お菓子購入&袋詰め時の人数確認)、(4)外来講師の航空券&宿泊手配、などを実施。また、当日は終日バックアップ体制をとり、円滑に1日を終える手助けがある。プログラム終了後は、実績報告書づくりに到る手助けなど、その後も多岐にわたり、実施代表者と連携&バックアップ体制がとられている。

【広報活動】

- 1) 地元新聞社1社に企画推進課が無料広告依頼をはかり、内容が掲載された
- 2) 前回同様、研究者が直接高校訪問し生徒派遣の依頼を行った。訪問できない高校へは郵送による案内を図った。
- 3) 沖縄県教育委員会の後援を申請し、ポスター及びチラシを作成した。
- 4) 当日、地元新聞社の取材あり

【安全配慮】

各高校への訪問時、本プログラムは実験を伴わないものであるが、往路の交通などにおいては十分留意して欲しいこと、また各生徒には当日の不慮の事故に備えての保険がかかっていることを伝えている。実施場所のバリアフリー環境は、車椅子でもやって来れる設計になっている。

【今後の発展性、課題】

医歯薬学系のプログラムであるが、福祉や進学した際に教職履修を目指している生徒にも裾野を広げ、募集をはかった。そのため、障害者関連の内容を、学校教育・障害教育などの福祉面も考慮しつつ、1日のプログラムで恵川所長からの発話を極力多くして進めた。例年、恵川所長をお招きしている価値は、非常に高いと考えている。この招聘は、本プログラムにとって非常に重要な位置を占めている。

1) 医療・保健・福祉を学ぶ大学に進学する時、「精神」分野の講義は必須となる。この時、奄美大島における障害者関連の内容を聞くチャンスは、この企画において僅少と考える。つまり、高校生時代に受講しておくことは有意義であると研究代表者は考えている。

2) 主催者の実施場所からは、かなり遠い距離の高校からの参加が毎年度ある。そのため、本プログラムに、意欲的に出てくる生徒がいることは間違いない。また、この年度も初参加の高校が出た。

3) 障害者雇用率が高い＝全国平均よりも高い県に、受講生らは暮らしている。しかし、こうした数値に実感がわかないはずだ。何故か。こうした考える視点を、今回、共有することを試みた。参加型にするには、もっと受講生からの意見＝発言を拾う必要は多々あったが、1日で終わる講座であることから、積極的な発言を求めることについてはどうしても難しい面も感じられた。

4) 「参加型」授業を目指すため、資料配付に工夫をこらした。ただ、必要としたい情報は多く、医歯薬学系からの視点を伝授する上で、分厚い資料の作成となった。また、当日配布の資料＝冊子を、1つにまとめた。A4サイズで、総頁数424頁(＝奥付、募集時のA3サイズのカラーコピーを折り込み)の冊子を作成し、1日の流れの中で、この冊子を参考にする場合は、右上の枠で囲った頁を参照してもらい、プログラムを潤滑に進めることとした。なお、この冊子とは別に、「マスコミ対応資料」(＝A4サイズ2枚のホッチキスどめ)を挿入し、受講者にも、本プログラムをわかりやすく説明した当該資料を見てもらうこととした(＝マスコミ取材は、当日の午前中1時間強、地元紙の新聞記者が見えられ、外来講師、また受講生らへ取材がなされていた)。

5) 受講生の申込用紙で、個人情報記載が必要となる。そのため、このことについて触れた文言を追加することが必要である。次回実施時からは、その改善をはかることとした。

【前々回(2012年度)の様子】



【前回(2013年度)の様子】



【実施分担者】

なし

【実施協力者】

6名

【事務担当者】

金城 太 企画推進課